

スポーツや武術などの場合、一見単純に見えるものほどその奥義を極めるのがむづかしいといわれております。このことは、工学の分野においてもいえるかもしれません。たとえば土木工学などはその良い一例かと思えます。他の専門分野で完成された材料・ノウハウを巧みに組み合わせて構造物をつくる。この、単純ともいえる作業の中にどれほどの無明があるのか、それは膨大な土木史をひもとくまでもなく、苦汁の歴史は土木技術者としての毎日の生活の中で数多く見い出されるところです。

「建設コンサルタント」

この言葉をわが国で耳にしはじめてから、すでに久しいかと思えます。〈企画－設計－施工〉の流れの中で、高度な技術力を駆使して大いなる成果を生んでゆくであろう技術者集団――それがかもし出す明日の建設界は豊かで薔薇色であろうと映りました。

しかし、10年余の年月を積み重ねた今日においても、建設コンサルタント生誕の日から期待された進展はみられず、その歩みは遅々としているかのように見受けられます。今回の特集は、この間の事情に対し数多くの識者の眼をとおしてその功罪を追うことを主題といたしました。

たとえば、〈発注者－コンサルタント－施工者〉というフロー、このフローは外国の例をみるまでもなくすぐにでもものをつくる流れの中で有機的に作用するかにみえました。――が、しかし、現実には建設コンサルタントは発注者側のアシスタント的な地位を脱し得ず、その評価は必ずしも高いとはいえません。

それではどうすればよいのか――。この問いかけに対し、今日までにも多くの様々なそしてそれぞれの立場から提言がありました。しかし、かかえている一見簡明ともみえるこの問題の奥行は意外に深く、理想とはほどとおい今日ともいえます。

今回の特集は、〈問題提示－検討－回示〉のうちで前二者までの段階が主体となりました。内容的にはほとんど同様な指摘を各論文ともしております。ここに示された単純・明解な提示――これらを解決していかないことには「市民としての健全な技術者集団」たるテリトリーの地位を追われることにもなりかねません。

「建設コンサルタント」

この新しくて古い技術・頭脳集団が幾何学的平等のもとに育ちゆくことを願って特集をお届けいたします。関係者各位のあたたかいご理解を願うところであります。

●特集・建設コンサルタント——その現状と課題

会誌編集委員会

開港を間近にひかえた新東京国際空港(羽田)の上空に、二重橋の建設が提供

